

理念(idea)としてのヨーロッパ

村田, 奈々子 / MURATA, Nanako

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(開始ページ / Start Page)

243

(終了ページ / End Page)

267

(発行年 / Year)

2015-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010577>

理念 (idea) としてのヨーロッパ

村田 奈々子

1. はじめに

ヨーロッパとは何か。この問いに向きあおうとするとき、私たちはヨーロッパを二つの要素から考える必要がある。第一に、地理的領域としてのヨーロッパである。第二に、歴史・文化的な経験に裏付けられた理念 (idea) としてのヨーロッパである。

これら二つの要素が、完全に重なりあうのであれば、上記の問いに答えることはさほど困難ではないだろう。地理的にヨーロッパとして区切られる領域における歴史を叙述し、その文化的特徴を示せばよいのである。その場合、ヨーロッパは同じ歴史を経験し、同質の文化を共有していると推定されることになる。しかし、現実には二つの要素が完全に重なりあうことはない。両者のあいだにはずれが生じている。本稿で述べることになるが、理念としてのヨーロッパの射程は、地理的領域のヨーロッパの射程に及ばない。このずれがあるため、上記の問いに答えることが難しくなる。このずれ——地理的領域のヨーロッパには包摂されるものの、理念としてのヨーロッパからは排除される要素——を説明する必要に迫られるからである。同時に、上記の問いが、探究する価値のある問いとして浮上してくるのである。

このずれは、いかに説明され得るのか。ずれを無視したヨーロッパはあり得るのか。あるいは、このずれに位置する要素は、不完全なヨーロッパとしてしか認識されないのか。ヨーロッパなるものを再考するうえで、ずれに注目することの意味は大きい。

本稿では、ずれに位置する要素として、ギリシア (人) に焦点をあてる。古代のギリシア人は、ヨーロッパという地理的領域の命名者である。彼らの文明は、ヨーロッパ文明の主要な礎のひとつと見なされている。しかし、理念とし

てのヨーロッパが生成する過程で、その射程から排除された存在でもある。果たして、ギリシアはどれほどヨーロッパたりえるのだろうか。

以下では、まず地理的領域としてのヨーロッパの範囲を確認する。次に、ヨーロッパが歴史的・文化的な理念として生成する過程を概観する。そのうえで、理念としてのヨーロッパに包摂された側が、ギリシア（人）に対していかなる態度をとっていたのかを考察する。

2. 地理的領域としてのヨーロッパ

通常私たちは、七つの大陸に分類して世界の地理を認識している。その七大陸とは、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南アメリカ、北アメリカ、オセアニア（オーストラリア）、南極である。大航海時代に、ヨーロッパが「発見」した南北アメリカは「新大陸」と名づけられた。それに対して、それ以前から知られていた世界——ヨーロッパ、アジア、アフリカの三大陸——を「旧大陸」と呼んだ。

イギリス人歴史家アーノルド・トインビーによると、このように大陸を基準として世界を把握するやり方は、古代ギリシアの船乗りによって作り出されたものと言う。彼らは、ヨーロッパとアジアという区別を最初に生み出した。ヨーロッパとアジアの境界は、エーゲ海からダーダネルス海峡、マルマラ海、ボスポラス海峡を抜けて黒海に出たのち、アゾフ海に入手前のケルチまでと想定されていた。古代ギリシアの初期哲学者である小アジアのミレトスのイオニア人たちも、この水路に沿う線を、二つの大地をヨーロッパとアジアとに分けて認識する際の境界と見なした。後になって、アフリカ（当時はリビアと呼ばれた）が加えられ、世界を三つの大陸によって認識する枠組みが根付いていった。古代のギリシア人は、自分たちにとって身近なエーゲ海を、世界を認識する際の中心に据えた。エーゲ海の東はアジア、西はヨーロッパ、南はアフリカと名付けて区別し、別々のものとして理解したのである。アジアとヨーロッパの境界はアゾフ海以北ではタナイス川（ドン川）、アフリカとアジアの境界はナイル川であるという見方が定着していった⁽¹⁾。

重要なのは、古代ギリシア人はヨーロッパを純粹に地理的なまとまりとして捉えていたという点である。「ヨーロッパ」が、なんらかの文化的、あるいは政治的な特徴をもつ統一体であるといった意味合いで用いられることはほとん

どなかったといってよい。ただし、古代ギリシア人が共有していた環境決定論的な思考から、ヨーロッパとアジアの間には環境の違いによる文化的差異が生じうると考えた思想家たちもいる。アリストテレスやヘロドトス、特にヒポクラテスの思想には、そのような見方が看取される⁽²⁾。

三大陸で世界を認識するあり方は、当時のギリシア人が活動していた範囲から生まれたものである。したがって、ギリシア人が植民・商業活動を展開したエーゲ海（より広範囲には地中海）、および黒海を超えた広がりを持たない。しかも、なぜ上述の領域をヨーロッパ、アジア、アフリカとそれぞれひとつのまとまりとして把握するのかといった、客観的な基準は存在しなかった。その意味で、古代ギリシア人が使いはじめたとされる地理的領域としてのヨーロッパは、恣意的に創られたものであったと言える。

この恣意性に対して、古代のギリシア人が無頓着だったわけではない。ヘロドトスは、三大陸による分類をみずから用いながらも、この分類に疑問を持ち続け、世界を正確に認識するためには実際の調査に基づいた地図を作成する必要があると考えていたふしがある⁽³⁾。この地理区分で、彼が不満に感じていたことのひとつは、アジアとアフリカの境界をナイル川においていたことであった。ナイル川を境界線として、その東と西を異なる土地として認識することは、現実にはひとつの統一体と見なされるエジプトを分断することを意味していた。これが彼を混乱させた。実際のところ、アジアとアフリカは互いに隣接しているし、ヨーロッパとも隣り合っている。にもかかわらず、なぜ別のものとして認識されなければならないのか。さらに、実際はひとつづきの土地なのに、なぜ三人の女性の名前をつけて分割しなければならないのか、なぜ川が地理的区分の境界線とされなければならないのか、彼には納得できなかつたのである⁽⁴⁾。

世界を三つの大陸にわけて理解するやり方は、中世に受け継がれた。TO図が、この世界観を端的に表している。この地図は地理的な正確さを全く欠いている。円形内部の二分の一がアジア、残りの四分の一ずつがヨーロッパとアフリカを表し、三つの部分がT字で仕切られている。このT字の部分が三大陸の境界となる、地中海・ナイル川・タナイス川（ドン川）である。円はさらに大きな円によって囲まれており、それが大洋を表している（図1）。

三大陸概念はその後も継承された。しかし、大陸を区別する境界線は変化した。人間活動によって生み出される現実の政治・経済・社会・風俗の共通性を、

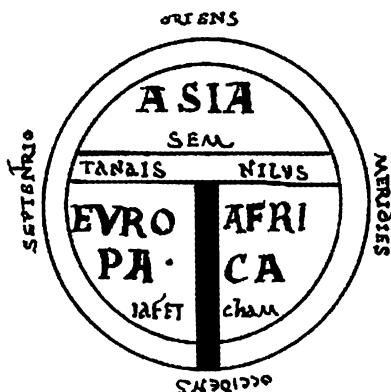


図1 TO 図 (セビリヤの司教イシドルスが7世紀に著した書物の11世紀の写本)

Denis Hays, *Europe: The Emergence of an Idea* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1957), PLATE I (b) から引用

ひとつの地理的区分の基準としようとする姿勢がみられるようになった。その結果、ナイル川とドン川が大陸を隔てる境界線としてははなはだ不適切であると見なされるようになった。アフリカとアジアの境界は、ナイル川ではなく、紅海—ペルシア湾—スエズ地峡におかれた。これで前述のヘロドトスの不満がようやく解消されたことになる。

アジアとヨーロッパの境界線についてはどうか。16世紀までに、地理学者たちは、ヨーロッパとアジアが狭い地峡で分離されていないこと、ドン川が北極海には注いでいないこと、アゾフ海が想像していたよりもずっと小さな海であることに気づきはじめていた。新たな境界線を見つけ出す動きが見られた。

18世紀、スウェーデン人将校フリップ＝ヨハン・フォン・ストラレンベルグ (Philipp-Johann von Strahlenberg) は、ウラル山脈がヨーロッパとアジアを分かち最も重要な指標たりえると主張した。この見解は、当時のロシア帝国のピョートル大帝が推進していた西欧化⁽⁵⁾ 政策に賛同する、ロシアの知識人たちによって支持された。この見解に従うならば、ロシア帝国の主要部分はヨーロッパに含まれることになるからである。ピョートル大帝の軍事・外交使節団の一員として活躍した歴史家のヴァシリ・ニキチッチ・タチシェフ (Василий Никитич Татищев) も、ウラル山脈をヨーロッパとアジアの境界線とする立場を擁護した。とはいえ、この境界線もなんら客観的な基準とはいえ

ない。古代ギリシア人の境界線と同様、恣意的なものにすぎなかった。ピョートル大帝に倣って西欧化政策を推進する一派は、この境界線を自明のものと考えたことで、歴史的にロシア帝国の核をなしてきた領域のヨーロッパ的特徴を強調することが可能となった。同時に、帝国東方のシベリアを、自分たちとは異質なアジアと位置付け、ヨーロッパの自分たちによる支配を正当化することにもつながったのである。当時ロシアで書かれた多くのテキストでは、ウラル山脈よりも東方に位置する広大な領域は、シベリアではなく「大タール」と記されていた。よりアジア的な響きを醸し出す「大タール」を好んだという事実からは、ヨーロッパに生きる自分たちの優位性を誇る意識が透けてみえる。まさに、西欧化政策を推進する一派のイデオロギーがこの境界線を創りあげたと言えよう。

アジアとヨーロッパの境界線をめぐっては、さまざまな議論があった。しかし19世紀半ばには、このウラル山脈を境界とする見方が、ロシアだけでなく西のヨーロッパ諸国でも受け入れられるようになった。ウラル山脈を南下し、ウラル川に沿ってカスピ海にはいり、その全長の三分の二のところまで今度は北西に向かってのびるカフカス山脈にいたる——ヨーロッパとアジアの境界線に関するこのような認識は、今日においても一定の影響力を保っている⁽⁶⁾。

3. 理念としてのヨーロッパ

13世紀末まで、ヨーロッパが地理的な記述をする場合以外に用いられることはほとんどなかった⁽⁷⁾。「ヨーロッパ」という語が、歴史的・文化的価値を含む理念 (idea) として意識され、使用されはじめるのは、14世紀に入ってからのことである⁽⁸⁾。

それ以前の時代で、ヨーロッパが何らかの歴史的・文化的なまとまりを表現する理念として用いられた数少ない事例として、9世紀のフランク王国のカール (シャルルマーニュ) 大帝を、同時代人が形容した文言が挙げられる。西のローマ帝国の滅亡後、ゲルマン諸王国が興亡を繰り返すなか、フランク王国は着実に領土を拡大していった。カールは、ザクセンやランゴバルトを領土に収めるだけでなく、東方からのアヴァール人の侵入を食い止め、イベリア半島のイスラーム教徒を撃退し、広大な統一国家を築いた。このカールを、同時代人は「ヨーロッパの父なる王 (Rex pater Europae)」あるいは「ヨーロッパの

尊敬すべき支配者（*Europae venerandus apex*）」と讃えたのである⁽⁹⁾。

カールによる征服活動が、かつてのローマ帝国の境界外に及んだ事実により、彼の試みは「ローマ的」ではなく「ヨーロッパ的」なものであると認識された。フランク王国の支配する領域がヨーロッパであると見なされたのである。しかもこのヨーロッパは、フランク王国が早くから公認していたローマ教会の管轄権が及ぶ領域と重なっていた。カールの王国が拡大するのと同時に、ローマ教会の管轄領域も拡大していった。したがって、このヨーロッパには、「ローマ教会の支配するキリスト教圏」という意味も含まれていた。実際、当時カールの王国は「キリスト教の帝国（*imperium Christianum*）」と称されることもあった⁽¹⁰⁾。この文脈にしたがうならば、「ヨーロッパの父なる王」カールは、「ローマ教会のキリスト教圏」の王ということになる。

一方、西暦 800 年に行われた、教皇レオ 3 世による「ローマ人の皇帝」としてのカールの戴冠は、ローマ教会とフランク王国の協力関係を公式化したものと理解される。西ローマ帝国は、476 年以降、皇帝の空位が続いていた。その間ローマ教会は、政治的にはビザンツ（東ローマ）帝国の皇帝に従属していた。カールの戴冠は、西ローマ帝国の復興を象徴していた。これによってローマ教会は、フランク王国という政治的後ろ盾を確固たるものにした。ローマ教会は、ビザンツ皇帝の政治的支配から離れるだけでなく、敵対するビザンツ帝国のコンスタンティノープル教会（東方教会）とも一線を画すことが可能となった⁽¹¹⁾。

カールのヨーロッパは、明らかに前節で見た価値中立的な地理的ヨーロッパではない。そこには政治的・宗教文化的なニュアンスが含まれている。カールのフランク王国、すなわちヨーロッパは、ローマ教会のキリスト教圏であり、同時に、政治・宗教的にビザンツ帝国に対抗する国家と位置づけられた。「ローマ人」とは、東方教会の信徒である「ギリシア人」のことではないキリスト教徒であり、「ローマ人」の世俗の長はヨーロッパを支配しているカールであると、同時代人は考えたのである。彼のヨーロッパ支配は、コンスタンティノープルの皇帝による東方教会の信徒の支配に相当すると見なされた⁽¹²⁾。

カールのヨーロッパは、地理的に認識されていたヨーロッパの全領域ではなく、その一部のみを指す。ひとつの統一された普遍的なキリスト教会という理念を否定し、その後進行するキリスト教会の二分化の予兆となった。その意味で、カールのフランク王国が、今日のヨーロッパ統合の出発点であると見なす

のは、誇張を含む見解であり、適切とは言えない⁽¹³⁾。

いずれにしても、このカールのヨーロッパが顕著な例として挙げられる以外は、ヨーロッパが、何らかの歴史的・文化的な意味合いを持つ理念として用いられることはほとんどなかった⁽¹⁴⁾。ヨーロッパは、11世紀までには、まったく廃れた概念と化していた⁽¹⁵⁾。一方、「キリスト教圏」(ラテン語 Christianitas/英語 Christendom) という語が、12世紀までには定着していた⁽¹⁶⁾。キリスト教は、現実には西方と東方の教会に分裂していたものの、理念上はひとつの統一された普遍的な世界宗教であることを志向する、境界といった考え方とはなじまない宗教である。西方であれ、東方であれ、キリスト教を信仰する者が住まうところすべてがキリスト教圏である。しかし現実には、このキリスト教圏は、ローマ教会の管轄するキリスト教世界に限定されていた。

この「キリスト教圏」という語と並行し、ローマ教会の管轄領域(16世紀以降は、プロテスタント教会の管轄領域も含まれる)で、14世紀以降、「ヨーロッパ」という語の使用例が徐々に数を増す。この「ヨーロッパ」は、地理的領域を価値中立的に意味しているのではなく、「キリスト教圏」の名の示す通り、宗教文化と同様の価値を含意する理念としてのヨーロッパであった。実際、「ヨーロッパ」の語を使用することにより、「キリスト教圏」という語によせる人々の情緒的な思いと近似する感情を表現する例がでてくる⁽¹⁷⁾。この「ヨーロッパ」は、「キリスト教圏」という表現と並行して使用されながら、徐々に後者を凌駕していく。17世紀から18世紀初めにかけて、「キリスト教圏」は時代遅れの用語として忘却され、「ヨーロッパ」が人口に膾炙することになる。

「ヨーロッパ」は、なぜこの時期に登場するのか。デニス・ヘイは、その理由を三点あげている⁽¹⁸⁾。第一に、普遍的な世界宗教としてのキリスト教という理念的前提——ひとつの統一されたキリスト教世界——が、この時期に完全に破綻したということである。ローマ教会と東方教会は11世紀に分裂したが、その後も両者の関係修復の試みは継続していた。13世紀には、東方教会を強制的にローマ教会に合同させることに一時成功したものの、14世紀にはふたたび両者の対立が深まる⁽¹⁹⁾。教会合同の必要性は常に語られたが、この時代には、もはや荒唐無稽な空想にすぎないと考えられるようになった。ローマ教会のキリスト教世界に生きる人々にとって、東方のキリスト教徒は、旅行者の語りに登場する風変わりな人々、あるいは化け物だった⁽²⁰⁾。同じキリスト教徒というよりは他者として認識されたのである。

東西教会の隔たり以上に見逃せないのは、教会の普遍性が揺らぐ状況が、ローマ教会内部で起こっていたということである。ローマ教皇を頂点とする一元的支配は徐々に崩れていった。世俗の君主は、みずからの領域にみずからの力が及ぶ教会をつくろうとした。教皇がローマではなくアヴィニョンに居を定め(1309-1377年)、彼らがフランスの政治権力と結びついたことに対して、それ以外の地域の人々は強く反発した。キリスト教徒としての同胞意識より、民族・地域としての一体感と民族・地域の利益が優先される状況が生まれていた。1378年には、ローマとアヴィニョンの両方にローマ教皇が立ち、ローマ教会内部が分裂した。この事態は、コンスタンツの公会議(1414-1418年)で、ローマに唯一の教皇を立てることで解決された。しかし一方で、公会議の出席者は民族ごとに審議をすすめ、それぞれの意見の違いから、公会議で教会改革を推進することが妨げられる事態も生じた⁽²¹⁾。公会議後、ローマ教皇が、キリスト教圏に対して普遍的な影響力を回復することはなかった。他方で、世俗の君主たちの力が強まり、教会はそれぞれの君主のもとで民族的色彩を帯びる方向に向かう⁽²²⁾。16世紀初頭のルターの宗教改革とプロテスタントの登場は、ローマ教会のキリスト教圏を破壊する最後の一撃となった。

第二の原因として、キリスト教圏の境界が変化したことが挙げられる。前述のように、理念上キリスト教圏は、ローマ教会の管轄権が及ぶ領域にとどまらず、キリスト教を信仰する者が住まう全領域を意味した。この理念としてのキリスト教圏の一部が、14世紀から15世紀にかけて失われたのである。第一回十字軍の勝利によって、中東のパレスチナの地に建国されたキリスト教王国(イェルサレム王国)は、1291年、イスラーム教の 맘ルーク朝によるアッカー(アッコ)攻略によって滅亡した。小アジアでは、オスマン帝国が東方教会の盟主ビザンツ帝国の領土を侵食しながら、版図拡大を続けていた。地理的にはヨーロッパとアジアの双方にまたがるビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルは、1453年に陥落する。黒海沿岸のトレビゾンド王国は、その後まもなく1461年に滅びた。地理的領域としてのアジアにおけるキリスト教国の存続は危殆に瀕していた。一方、新たな領域がキリスト教圏に加えられた。14世紀末にはリトアニアが公式にローマ教会に改宗した。一世紀後には、イベリア半島のイスラーム教徒が駆逐され、レコンキスタの完成をみた。その結果、地理的領域としてのヨーロッパとキリスト教圏が、かなりの程度重なる状況が生まれたのである。普遍的であるはずの教会は、もはや普遍的ではなくなり、ヨー

ロッパだけがキリスト教を信仰している、というのが現実であった⁽²³⁾。それは、14世紀以降作成された新たなタイプの地図——それぞれの地域の政治権力とその宗教を示す印が記載された地図——にも表現された。旅行者だけでなく、多くの人々がこの地図を目にしたという事実は重要である⁽²⁴⁾。これによって、地理的領域のヨーロッパとキリスト教圏の重なり合いが、視覚的に刷り込まれてゆくことになったと想像されるからである。

第三に、人文主義者の用語選択が及ぼした影響を考慮する必要がある。彼らは一様に「キリスト教圏」ではなく「ヨーロッパ」を好んだのである。古代のラテン語に真正さを求めた書き手たちにとって、中世のラテン語は嫌悪の対象であった。Christianitas という語は、「純粋な」語彙を探し求めただけでなく、中世的な思考と結びつく語を避けようとした学者の嗜好に反していたのである。Christianitas が、彼らのつくる六歩格の詩行にそぐわないという実際的な問題により、「ヨーロッパ」が彼らの間で好まれたという側面も指摘できる。

世界宗教としてのキリスト教という理念の崩壊、世俗の君主と国家権力の伸張にとまなう教皇の普遍的影響力の弱体化、人文主義者の知的活動といった要素が絡まりあいながら、「ヨーロッパ」という語が、キリスト教圏（ローマ／カトリック教会および宗教改革後はプロテスタント教会を含む）の歴史と文化を背負うかたちで登場してきたのである。この語は、単なる地理的な概念ではなく、情緒的な感情・愛着を人々に喚起した。とはいえ、人口に膾炙した「キリスト教圏」という語が直ちに放棄され、「ヨーロッパ」の語の使用が瞬間に広まったというわけではない。14世紀から17世紀は、「キリスト教圏」と「ヨーロッパ」という二つの語の使用が入れ替わる過渡期である。この時期においても、キリスト教が、人々の生活を規定する重要な要素であり続けたことに変わりはない。したがって、「キリスト教圏」と「ヨーロッパ」の語は、しばらくの間共存を続けた。しかしながら、16世紀には、「ヨーロッパ」と「キリスト教圏」が含意する理念は同一のものであると認識されるようになる⁽²⁵⁾。しだいに「ヨーロッパ」の使用頻度が「キリスト教圏」を凌駕するようになる。17世紀から18世紀初めにかけて、「キリスト教圏」は人々から忘れられていく運命をたどった⁽²⁶⁾。人々は、ヨーロッパという視点から自分たちを意識し、世界を把握しようとした。外交の場では、1714年のユトレヒト条約が、キリスト教圏に由来する語——*Respublica Christiana*——に言及した最後となった⁽²⁷⁾。理念としてのヨーロッパは、このような経緯を辿って、

今日にいたっているのである。

4. 理念としてのヨーロッパからみるギリシア人

理念としてのヨーロッパは、地理的領域としてのヨーロッパよりも狭い領域に限定される。前節でみたように、理念としてのヨーロッパが、ローマ教会の歴史と文化という価値を内包する以上、ヨーロッパから排除されるのは、東方教会が影響力を持つ領域ということになる。ヨーロッパの人々にとって、東方教会圏は、キリスト教世界ではあったものの、自分たちと歴史と文化を共有するヨーロッパであるとは見なされなかった。

この東方教会圏を体現していたのが、ギリシア人のビザンツ帝国である。ヨーロッパは、ビザンツ帝国、そしてギリシア人をいかなる眼差しで見つめていたのだろうか。本節では、フランチェスコ・ペトラルカ (Francesco Petrarca) (1304-1374 年) と、のちにローマ教皇ピウス 2 世となるエネア・シルヴィオ・ピッコローミニ (Enea Silvio Piccolomini) (1405-1464 年 / 教皇在位 1458-1464 年) の例をみていく。

ペトラルカは、理念としてのヨーロッパが登場しはじめたころに、今日のイタリアに生きた人文主義者である⁽²⁸⁾。ペトラルカにとって、ビザンツ帝国とその臣民のギリシア人は、キリスト教徒同胞ではない。明らかに敵意の対象であり、まったくの他者として扱われている。このような彼の態度は、ビザンツ帝国に対してジェノヴァ人が「復讐」を果たすべく十字軍を組織するよう教皇に進言していることから見取れる。

すでに 1204 年の第四回十字軍は、ビザンツ帝国を標的にして、コンスタンティノープルを奪った。しかし、1261 年には、ギリシア人が再びこの都市を奪いかえすことに成功していた。1271 年、ビザンツ皇帝の主導によって短期間実現された東西教会の合同が、ビザンツ帝国の臣民やエリートによって拒絶された出来事は、ギリシア人が不実の輩と見なされる十分な理由となりえた。これらの出来事に続く 14 世紀において、ギリシア人に対する敵意は、ペトラルカに限られたものではなく、当時のヨーロッパで広く共有されていた。ローマ教会の信徒の目には、東方教会のギリシア人は、教会の一体性の実現を阻害する「卑しい分離派、あるいはキリスト教徒集団から故意に離脱した『異端』」⁽²⁹⁾とすら映った。

ペトルルカは、ジェノヴァのドージェ（総督）ジョヴァンニ・ディ・ヴァレンテ（Giovanni di Valente）にあてた手紙のなかで、ヴェネツィア人と友好関係を築いて、ギリシア人に対抗するよう促している。彼は、1352年2月のボスポラス海峡の戦い——ジェノヴァ軍が、ビザンツ、ヴェネツィア、アラゴン連合軍と対峙し、困難の末勝利した戦い——に言及して、ビザンツ帝国のギリシア人について以下のように述べている。「いやまさに、私は悲しむどころではない。むしろ喜びに打ち震えるほどなのだ。高貴なことは何一つ自分では為しえない、あの嘘つきで怠惰なギリシア人の身の上を思うと。私はあの忌まわしい帝国が、あの過ちの巣窟が、あなたがたの手で滅ぼされるのを見たいと熱望する。もし仮にキリストが、あの者たちの悪行を懲らしめる役目をあなた方にお与えになったのなら。もしキリストが、カトリックを信仰するすべての民族が不幸にも後回しにしてきた復讐を果たすよう、あなたがたにお命じになったのなら」⁽³⁰⁾。

1366年⁽³¹⁾の教皇ウルバヌス5世（在位1362-1370年）への手紙では、ペトルルカのギリシア人への敵意、ギリシア人を他者とみなす眼差しはさらに際立つ。彼は、十字軍の本来の敵であるイスラーム教徒よりも、分離派とはいえキリスト教徒であるギリシア人に、十字軍を差し向けるよう促す。その理由は、ビザンツ帝国のギリシア人は、イスラーム教徒よりも地理的に「自分たちにより近く、よりたやすい標的」⁽³²⁾だからだった。なにより、ギリシア人は「（イスラーム教徒の）敵よりも悪い」⁽³³⁾人々であるとペトルルカは言う。当時、聖地イェルサレムは、イスラーム教徒によって占領されていた。手紙のなかで彼はこう述べる。「われわれと、イェルサレムをいま掌握しているわれわれの敵とのあいだは、大いなる海によって隔てられているという現実があります。それゆえ、われわれとわれわれの敵とのあいだに立ちはだかる事情を考えれば、それは少なからざる骨折りとなります。つまり、われわれの力が及ばないため〔事態の解決が〕先延ばしとなっているのは仕方がないことです。もっとも、ほかならぬわれわれ自身の不和が原因となって力が及ばないのであれば、何ら弁解の余地はないのですが。一方、われわれとあの卑劣なギリシア人とのあいだには、われわれ自身の無気力と怠惰を除いて、立ちはだかるものは何もありません。というのは、彼らは限りない憎悪を燃やしこそするものの、まったくの無力だからであり、イタリアの国家が二つほど〔ギリシア人との戦いを〕欲すればいいだけのことだからです。もし、猊下がそれがよいと思し召しなら、

イタリアの諸国家が協力するにせよ、単独に行動するにせよ、いくさの仕方も知らぬあの〔ビザンツ〕帝国を屈服させるか、母なる〔ローマ〕教会の支配のもとに引き戻すか、いずれかをおこなうのは、イタリアにとって容易なことだと、私は狎下に保証いたします」⁽³⁴⁾。

ペトラルカの時代から約1世紀後のイタリアの人文主義者ピッコローミニは、イタリアのシエナ出身の人文主義者・詩人で、のちに神聖ローマ皇帝フリードリヒ3世に認められ、ウィーンで外交に携わった。1445年に聖職の道に入り、1458年にローマ教皇ピウス2世となる。彼は、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノーブルが、まさにオスマン帝国によって占領される前後の時代を生きた人物である⁽³⁵⁾。

コンスタンティノーブル陥落に象徴されるビザンツ帝国の消滅を、ローマ教会のキリスト教世界、すなわちヨーロッパの同時代人は、今日私たちが認識するほどの歴史的な大事件とは認識していない。それなりの衝撃はあったものの、何よりそれはヨーロッパの外の出来事ではしかなかった。ヨーロッパの世俗の君主たちに、コンスタンティノーブル陥落がキリスト教世界の存続をゆるがす最大の危機であるという認識はなかった。オスマン帝国によるビザンツ帝国侵攻は数世紀にわたって漸次おこなわれたものであり、帝国の消滅はその仕上げにすぎないと見なされた。イギリスは百年戦争と薔薇戦争の時代であり、年代記作者がコンスタンティノーブル陥落に言及することはなかった。概して、この出来事はヨーロッパでは無視されたのである⁽³⁶⁾。

そのような状況の中にあって、イスラーム教徒の脅威に繰り返し危機感を表明し、イスラーム教徒に対する十字軍遠征の実現を訴えたピッコローミニは例外的な存在である。彼は、「ヨーロッパ」という語を多用した。彼のヨーロッパには、反イスラーム精神という要素が色濃い。その文脈のなかで、ギリシア人はどのように扱われているだろうか。

彼は、教皇ピウス2世として、コンスタンティノーブルを征服したオスマン帝国のスルタン・メフメト2世宛の書簡に、以下のように書き記している。「あなたが、キリスト教徒諸民族の力量に気づいていないとはわれわれには信じがたい。スペインがいかに強く、フランスがいかに好戦的で、ドイツにはどれだけ多くの人々が住み、イギリスがいかに有力であり、ポーランドがいかに勇敢で、ハンガリーがいかに精神的であり、イタリアがいかに豊かで、勇猛で、戦闘における技術に優れていることか」⁽³⁷⁾。このように、ローマ教会に属する

国々の特徴を列挙した上で、メフメト2世が征服した土地——小アジア、バルカン半島、北アフリカ——のキリスト教徒は、真のキリスト教徒ではないと彼は断じている。「彼らすべては、キリストを崇拝しているとはいえ、何らかの間違いに染まっている——アルメニア教徒、ヤコブ派信徒、マロン派信徒といった人々のことである。あなたがコンスタンティノープルに侵攻した時、ギリシア人たちはローマ教会との合同に背を向けていた。彼らはフィレンツェでの合意を受け入れず⁽³⁸⁾、間違いに染まったままだったのである」⁽³⁹⁾。このように述べて、スルタンが支配したと考えているのは偽のキリスト教徒でしかない指摘し、キリスト教世界が大きな打撃を被ってはいないかのような態度を示す。その上で、ヨーロッパの真のキリスト教徒たちは、イスラーム教徒に従属することのない、相当の力量を備え持っていることを示すのである。ここに見られるように、ビザンツ帝国の東方教会の信徒たるギリシア人に対するピッコローミニの態度は、1世紀前のペトラルカと同様であり、ギリシア人がヨーロッパには包摂されえないカテゴリーに分類されているのが分かるのである。

この書簡のなかでさらに興味をひくのは、スルタン・メフメト2世に対して、ピッコローミニがキリスト教（ローマ教会）への改宗を促している点である。ピッコローミニは言う。「もしあなたがキリスト教徒に対する支配の拡大を望み、あなたの名声をできるだけ栄光あるものにしたいのならば、金も武器も軍隊も艦隊も必要ありません。ほんのすこしのことで、今この世に生きている人間のなかで、もっとも偉大で、もっとも勢力を持ち、もっとも輝かしい人になることができます。〔…〕ほんのすこしの水で、あなたは洗礼を受け、キリスト教の典礼に参加し、福音の信仰へと導かれることになるのです。これを受け入れさえすれば、栄光においてあなたを凌ぎ、権力においてあなたに匹敵する指導者は、もはやこの世界にはひとりとして存在しないことでしょう。われわれはあなたを、ギリシア人と東方を支配する者と呼ぶでしょう。武力によって不当にもあなたが今手にしているものを、あなたは正当な権利として所有することができます」⁽⁴⁰⁾。このように、スルタンがキリスト教徒になるならば、ギリシア人や東方を政治的に支配することには何ら問題はないとピッコローミニは言う。東方教会のギリシア人よりも、イスラーム教徒のスルタンのほうが、ローマ教会に改宗させること、すなわち自分たちの「味方」とすることはたやすいと考えているかのような態度である。「ほんのすこしの水」でイスラーム教徒からキリスト教徒になると言う表現には、教皇の言葉とは思えぬ軽さが

あるような印象さえ受ける。実現可能性の有無は別として、反イスラーム的態度で臨んでいたピッコローミニがこのような提案をすることじたいが驚きである。この提案は、ローマ教会との合同に頑強に抵抗する東方教会のギリシア人への嫌悪に由来する、ギリシア人に対するローマ教皇の奸計にも思えてしまう。

ところが、同時期の彼の手紙のなかには、ギリシアとギリシア人がまったく異なる様相で描かれているものがある。コンスタンティノープル陥落直後に教皇ニコラウス5世（在位1447-1455年）に宛てた書簡では、オスマン軍の侵攻によって、古代ギリシアの文学的伝統が失われることに強い憤りと悲しみを表明するのである。コンスタンティノープル陥落は、ホメロス、ピンダロス、そしてメナンドロスにとって第二の死である、とピッコローミニは嘆くのである⁽⁴¹⁾。別の書簡には、以下のように記されている。「ああ、高貴なるギリシア。今、あなたの最期を見るがいい。あなたはついに真の死を迎えた。ああ、かつて名声と繁栄を享受したどれだけ多くの都市が、いまや破壊されてしまっただろうか！ テーベはいまどこにあるのか。アテネは、ミケーネは、ラリサは、スパルタは、コリントスはどこにあるのか。そのほか古代の忘れられぬ都市は今どこにあるのか。それら都市の遺壁を探そうにも、あなたはもはやその廃墟すら見つけられないだろう」⁽⁴²⁾。

ここには、古代ギリシアの歴史と文化をみずからの知的活動の源泉とみなす、人文主義者としてのピッコローミニの姿が浮かび上がる。ヨーロッパの人文主義は、この点において、ギリシア（の都市）とギリシア人を他者化せず、みずからの側に置いている。彼と同時代に現実に存在したギリシア人の帝国（ビザンツ帝国）とギリシア人はヨーロッパから排除される。一方、もはや存在しない古代ギリシアという幻影は、ヨーロッパに包摂されることになる。ヨーロッパにとって、二つの相反するギリシア（人）が存在したということである。

5. ギリシア（人）とヨーロッパ——トロイ人起源説

ヨーロッパが、ギリシア人を同胞とみなさなかつたのは、東方教会の信徒であるという理由によるだけではない。ヨーロッパに古くから流布したある伝説も、ギリシア人を他者化することに寄与したのである。ヨーロッパの諸民族は、小アジアのトロイ人の末裔であるという伝説である。

紀元前1世紀のローマの詩人ヴェルギリウスの長編叙事詩『アエネイス』に

は、ローマの起源が神話的に描かれている。ヴェルギリウスは、トロイ戦争に敗れたトロイの末裔がローマを建国したと物語る。トロイ戦争は、今日のトルコ領にあたる小アジアにあったトロイの王国に対し、ギリシア本土から遠征したギリシア人の軍が10年にわたる攻囲の末、最終的に勝利した戦いである。この戦いは、ホメロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』に描かれている。ヴェルギリウスは、トロイ滅亡後の、トロイ軍の勇将アイネイアースの流浪の旅を語る。アイネイアースは、最終的に今日のイタリア中部を流れるテヴェレ川下流の地ラティウムに辿りつき、この地に新たな祖国の礎をつくりあげたという内容である。この新たな祖国こそ、のちのローマである。ローマの建国者とされる伝説上の人物ロムルスは、アイネイアースの子孫のひとりであり、ローマ皇帝アウグストゥスの祖先とも見なされる。

この物語は、ローマ時代のみならず、後世にも読みつがれた。小アジアから難を逃れてヨーロッパの地へと移動したトロイ人——というヴェルギリウスの想像力は、フランク人の系譜にも影響を及ぼすことになる。フランク人の祖先はトロイ人であるという架空の言説が生みだされるのである。その最初の例は、7世紀のフレデガリウス (Fredegaricus) によって書かれたとされる年代記に見いだされる⁽⁴³⁾。年代記によると、トロイ陥落後、脱出に成功したトロイ人は、フランキオ (Francio) という名の者を王に選んだ。彼に従った人々は、長い困難と戦いを経てライン川を渡河し、ガリアに侵入したフランク人として姿を現した、というのである⁽⁴⁴⁾。その後も、フランク人のトロイ人起源説は継承・拡大解釈され、12世紀以降、ヨーロッパのほとんどの民族は、トロイ人が自分たちの先祖であると考えようになったとされる⁽⁴⁵⁾。さらにのちの時代には、チューダー家やハプスブルク家といったヨーロッパの王家が、系図を神話時代にまで遡り、みずからをトロイ人と関連づけることによって、その正統性を主張した⁽⁴⁶⁾。この立場にたつと、ヨーロッパの諸民族にとって、キリスト教を受容するはるか以前から、ギリシア人は宿敵だったということになる。

興味深いのは、中世および近世のヨーロッパの人々は、このトロイ人起源説をトルコ人にまで敷衍し、トルコ人もトロイ人の末裔であると見なした点である。11世紀末までに、セルジューク朝のトルコ人は、エジプト、小アジアの一部、そしてイェルサレムを占領した（これが第一回十字軍遠征のきっかけをヨーロッパに与えることになる）。ヨーロッパの人々にとって、トルコ人は脅

威であり、同時に隣人として立ち現れた。このトルコ人を、遙か古代に小アジアで勢力をふるったトロイ人と同一視することはさほど難しいことではなかった。何より、ヴェルギリウスの作品によって広く人々に親しまれたトロイ人は Teucric と記されていた。この語は、トルコ人を意味するラテン語の Turci もしくは Teuciae, あるいはイタリア語の Turchi と容易に関連づけられた⁽⁴⁷⁾。トルコ人はトロイ人の子孫であると信じられるようになった。それは、トルコ人とヨーロッパの諸民族は、先祖を同じくする「兄弟」であるということの意味した。キリスト教徒である自分たちにとって、トルコ人はイスラーム教徒であると言う意味でたしかに「他者」であり「敵」だった⁽⁴⁸⁾。しかし、それとは別の次元で、トロイ人という先祖を共有するトルコ人への親しい感情をヨーロッパの人々は抱くようになったのである。同時にそれは、ギリシア人を、トルコ人と自分たちの共通の敵と位置付けることにもつながっていった。ギリシア人のビザンツ帝国がオスマン帝国によって滅ぼされたとき、2500年前にギリシア人によって滅ぼされたトロイ人の復讐が、トロイ人を先祖とするオスマン帝国のトルコ人によって果たされたのだと、ヨーロッパでは広く信じられたのである⁽⁴⁹⁾。

この伝説が根強く信じられていたことは、以下の事例からも読み取れる。アンゲラン・ド・モンストレレ (Enguerrand de Monstrelet) (1400-1453年)の年代記の継承者は、スルタン・メフメト2世が教皇ニコラウス5世に宛てたとされる手紙を、ラテン語とフランス語で出版している。その手紙の中で、オスマン帝国の進撃に対し十字軍結成が唱えられていることについて、スルタンはこう不満を述べている。「イタリア人がわれわれに対抗するとは驚きであり、また信じがたいことです。というのは、われわれがイタリア人を愛するのは生まれ持ったことです。イタリア人はトロイ人の血を受けついでいます。それゆえ、イタリア人はトロイ人本来の高貴さと豪宕さを持ちあわせています。さて、われわれはその同じ血と豪宕さを古くから継承する者であります。そして、偉大な〔トロイの〕王プリアモスとその一族の流れをくむわれわれの祖先は、トロイ人の高貴さと豪宕さに磨きをかけ、よりよきものにしてきました。したがってわれわれは、われわれの神々がわれわれの祖先に与えた約束にしたがって、ヨーロッパの一部にわれわれの帝国を拡大しようと考えているのです。われわれはトロイを再建し、ヘクトルの血の復讐を果たそうとしています。ギリシアの帝国〔ビザンツ帝国〕を服従させ、われわれの神パラス(ママ)の王

国と一体化させることによって。われわれはトロイを滅ぼした忌まわしき輩の子孫を罰することでしょう」⁽⁵⁰⁾。

この手紙が実在した可能性はほぼないといってよい。この手紙には「ヨーロッパ」の語が用いられている。しかしイスラーム世界で、ヨーロッパ、アジア、アフリカという名で大陸が広く知られるようになったのは、19世紀にはいつてからのことに過ぎない⁽⁵¹⁾。イスラーム世界では、キリスト教世界をひとつのまとまった統一体とはそもそも見なしてはいなかった。彼らは、ビザンツ帝国に倣って、東方のキリスト教世界を、「ローマ」を意味するルーム (Rûm)、西方のキリスト教教会の世界を、「フランク人の国」を意味するフィランギスターン (Firangistân) と呼んでいた⁽⁵²⁾。

しかしながら、この手紙は実在のものと思われ、その後もさまざまな著作で繰り返し言及されることになる。トルコ人とヨーロッパの人々が、トロイ人を共通の祖先とするという伝説は、16世紀末頃までには歴史家によって退けられ、影響力を失った。しかし17世紀までは、流行の、ときには正統な説として一定の影響力を持ちつづけ、ヨーロッパの人々の想像力をかきたてたのである⁽⁵³⁾。

この伝説が影響力を保ったことは、ギリシア人を敵と見なすヨーロッパの人々の態度がその後も続いたことを意味した。それは、キリスト教徒としてのヨーロッパの人々の良心を慰める言い訳にもなりえたのである。ヨーロッパは、オスマン帝国による東方教会のキリスト教徒に対する攻撃に対し、彼らを救済するための手段を結局のところ講じることができなかった。その結果、少なからぬキリスト教徒を、イスラーム教徒の支配の手中に陥れる結果をもたらした。しかし、所詮ギリシア人はヨーロッパとは異質の存在であると考え、トロイ人起源説は容易にしたのである。

6. むすび

オスマン帝国領に入った地理上のヨーロッパは、ヨーロッパでは、ヨーロッパ・トルコ (European Turkey) として一般には認知された。そのヨーロッパ・トルコのギリシア人は、1821年、オスマン帝国に反旗を翻し、独立戦争を開始した。1453年のコンスタンティノープル陥落時とは異なり、ギリシア人に救いの手を差し伸べるため、ヨーロッパから多数の義勇兵が馳せ参じ

た⁽⁵⁴⁾。ペトルルカやピッコローミニの時代から数世紀を経て、ヨーロッパは東方教会の歴史や伝統をもヨーロッパの価値として受け入れたのであろうか。理念としてのヨーロッパは、それによって地理的領域としてのヨーロッパとほぼ重なったのであろうか。「ヨーロッパ」が内包する意味の変化が、19世紀はじめのギリシア人支援に結びついたのであろうか。

答えは否である。理念としてのヨーロッパが有する価値観は、ローマ／カトリック教会とプロテスタント教会のキリスト教圏の歴史と文化の伝統を基盤としつづけていた。このヨーロッパで、ギリシア人が名誉ある地位を占めることを可能としたのは、唯一、古代ギリシアの知的・文化的貢献をおいてほかになかった。19世紀はじめのギリシア人は、東方教会の信徒である限りにおいて、ヨーロッパからは除外される存在であった。しかし、同じ彼らが古代ギリシア人の末裔であることを主張することによって、ヨーロッパにとって無視しえない存在となったのである。ヨーロッパで18世紀に高まった親ギリシア主義（フィルヘレニズム）——古代ギリシアを崇拜し賛美する文化的潮流——も追い風となった。

独立戦争開始直後、ペロポネソス半島のギリシア人名望家ペトロス・マヴロミハリス（Πέτρος Μαυρομιχάλης）は、救いの手を差し伸べてもらうべく、ヨーロッパ列強にむけて、以下の宣言を發した。「…われわれが正義ある聖なる企ての目標を早急に達成し、われわれの諸権利を再び手に入れ、われわれの不幸なる民族を再生させるために、ヨーロッパのすべての文明化された人々からわれわれは助力を求めている。われわれの母なるギリシアは、あなたたちを照らす光であった。これを理由として、ギリシアは、あなたたちの活発な人道的支援を求めるのである。武器、資金、そして助言を、ギリシアはあなたたちから期待しているのである。われわれはあなたたちにギリシアからの大いなる感謝を約束しよう。その感謝の気持ちを、ギリシアは、より榮えるであろう未来において、行動によって証明することになるだろう」⁽⁵⁵⁾。ギリシア人は、自ら古代ギリシア人の末裔であると主張し、ヨーロッパに寄り添うことで、近代国民国家を建設することを目指したのである。実際、イギリス・フランス・ロシア軍がオスマン・エジプト軍に勝利したことが決定打となって、ギリシアは1830年独立を果たす⁽⁵⁶⁾。

しかしながら、この時独立したギリシアが、本論でみてきた理念としてのヨーロッパに包摂されたと見なすことはできない。ヨーロッパに包摂されうるのは、

現実のギリシアやギリシア人ではなく、あくまで理念としてのギリシアでしかなかったのである。地理的領域としてのヨーロッパと、理念としてのヨーロッパのずれは埋まらないままだった。

ヨーロッパからの義勇兵は別として、ヨーロッパ列強が独立戦争でギリシア反乱軍側についていた原因を、親ギリシア主義にのみ帰することはできない。そこには、いわゆる「東方問題」⁽⁵⁷⁾ — オスマン帝国領の処理をめぐるヨーロッパ列強の対立 — として知られる、複雑な政治・外交上の駆け引きがあったことを考慮しなくてはならない。ヨーロッパ列強は、国益のためにヨーロッパ・トルコをふくむ東地中海周辺一帯に影響力を及ぼそうと互いにしのぎを削る時代を迎えていた。ギリシアの独立は、ヨーロッパ列強内の対立がもたらした副産物でもあった。

ヨーロッパ列強は、東方教会の盟主を自認するロシアが、ギリシア人だけでなく、オスマン帝国内の東方教会の信徒に過度な影響力を行使することを恐れた。ヨーロッパ列強は、彼らをキリスト教徒同胞とみなし、キリスト教徒の保護を口実に、オスマン帝国の内政に介入できる余地を確保しようとした。その意味で、理念としてのヨーロッパは、質的に変容したという見方もできよう。19世紀後半の帝国主義の時代には、ヨーロッパは、「文明」理念と絶対的な結びつきを持って、「文明化の使命」を掲げて世界に乗り出していく⁽⁵⁸⁾。世界宗教たらしめたキリスト教がかつて果たせなかった世界の統一が、ヨーロッパの名のもとに実現されようとしていた。もちろんそれは、ヨーロッパによる世界の分割と、ヨーロッパ的価値観の押しつけであったにすぎないのではあるが。しかも、ヨーロッパを構成する国々は、それぞれのナショナリズムに支えられていたにすぎず、決して一体として行動したわけではなかったのであるが。この点について、冷静に観察していたのが、19世紀後半のプロイセン／ドイツの政治家ビスマルクである。彼にとって、ヨーロッパとはひとつの統一された政治的実体、あるいは主体ではなく、地理的概念以外のなにものでもなかった。ビスマルクによれば、「ヨーロッパ」という語を使っているのは、敢えて危険を冒すことなく他国からなんらかのものを奪うことを欲する政治家たちだけである⁽⁵⁹⁾。政治家が口にする「ヨーロッパ」という語は、他国を犠牲にして自国の利益を得ようとする意図を覆い隠すための美辞麗句に過ぎないと、ビスマルクは見抜いていたのである。

二度の世界大戦後、ヨーロッパの国々は統合の道を探りはじめる。そのプロ

セスが、今日のヨーロッパ連合（EU）に結実している。1981年、ギリシアは、今日のEUの前身にあたるヨーロッパ共同体（EC）の十番目の加盟国となった。東方正教を主要な宗教とする国家としては、初めての加盟であった。その後今日に至るまで、EUは東方に拡大しつつけている。EUという組織を、あらたな理念としてのヨーロッパと位置付けた場合、地理的領域としてのヨーロッパとのずれは、限りなく小さなものとなっている。もちろん、このずれが簡単には解消しえない問題であることは、今日のウクライナとロシアの状況が示している。

とはいえ、本稿で考察した、ローマ／カトリックおよびプロテスタント教会圏の歴史と文化を背景にした理念としてのヨーロッパが、EUが体現するヨーロッパに凌駕されたわけでは決してない。このヨーロッパは強い生命力に支えられている。現に、EUでも実際的な力を持ち、主役級に振る舞うことができるのは、この理念としてのヨーロッパの歴史と文化を背景にしている国々である。私たちの目には、これらの国々こそが「真の」ヨーロッパであると映る。EUが理念としてのヨーロッパの未来のモデルであるなら、本稿で見た理念としてのヨーロッパは過去の歴史から浮かびあがるものである。この過去を共有しないヨーロッパのヨーロッパ性はどこに求めるべきなのか。探究すべき問題は多く残されている⁽⁶⁰⁾。

〈注〉

- (1) Martin W. Lewis & Karen E. Wigen, *The Myth of Continents: A Critique of Metageography* (Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press, 1997), 21-23.
- (2) Lewis & Wigen, *The Myth of Continents*, 22n8. アリストテレス（山本光雄訳）『政治学』（岩波文庫、2011年）324-325頁。ヘロドトス（松平千秋訳）『歴史』上（岩波文庫、2013年）中（岩波文庫、2014年）下（岩波文庫、2014年）各所に。ヒポクラテス「空気、水、場所について」ヒポクラテス（小川政恭訳）『古い医術について・他八篇』（岩波文庫、1975年）27-28頁。
- (3) Germaine Aujac, "The Foundation of Theoretical Cartography in Archaic and Classical Greece," in *The History of Cartography*, vol. I, *Cartography in Prehistoric, Ancient, and Medieval Europe and the Mediterranean*, eds. J. B. Harley and David Woodward (Chicago: University of Chicago Press, 1987), 136.
- (4) ヘロドトス『歴史』中、34-35頁。『歴史』には、「リビアはその地方の土着の

女リビア (リビュア) にちなんだ名であると多くのギリシア人はいっており、アジアはプロメテウスの妻の名に基いたものという。[……] (ヨーロッパについては命名者はわからないが——引用者注) テュロスの女エウロペから得たことをいい得るのみである」とある。

- (5) 一般に westernization と呼ばれるものであるが、本稿の立場からすれば、「西欧」「東欧」の二分法によるのではなく、あくまで、次節で述べるローマ (カトリック) 教会とプロテスタント教会のキリスト教圏の範例に倣おうとする政策を意味する。
- (6) Lewis & Wigen, *The Myth of Continents* 27-28; Mark Bassin, "Russia between Europe and Asia: The Ideological Construction of Geographical Space," *Slavic Review* 50-1 (Spring, 1991): 6-7; Denys Hay, "'Europe' and 'Christendom': A Problem in Renaissance Terminology and Historical Semantics," *Diogenes* 17 (1957): 54.
- (7) Denys Hay, *Europe: The Emergence of an Idea* (Edinburgh: The Edinburgh University Press, 1957), 51. ビーター・パークは、13-14 世紀に、「ヨーロッパ」という語の使用頻度が増加したことは重要であるとする一方で、それを過度に強調すべきではないと述べている。ダンテ (1265-1321 年) の『神曲』では、「ヨーロッパ」への言及が 3 回であるのに対し、「イタリア」が 11 回、「キリスト教徒」「キリスト教」が 15 回である。ボッカッチョ (1313-1375 年) の『デカメロン』には、多くの地名があらわれるにもかかわらず、「ヨーロッパ」への言及はまったくない。Peter Burke, "Did Europe Exist Before 1700?" *History of European Ideas* 1 (1980): 23.
- (8) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 96.
- (9) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 51.
- (10) Karl J. Leyser, "Concepts of Europe in the Early and High Middle Ages," *Past and Present* 137 (1992): 33-34.
- (11) 唯一のローマ皇帝権保持者を自認するビザンツ皇帝は、カールが「ローマ人の皇帝」として戴冠されたことを侮辱と受け止めた。ビザンツ皇帝は、カールを「皇帝」(βασιλεύς) と呼ぶことでは妥協したが、「ローマ人の」皇帝とは認めなかった。なお、ビザンツ帝国の臣民は、多様な民族から構成されていたものの、「ロメイ (ローマ人)」(政治的規準としては、帝国内に住む、ローマ皇帝の宗主権を認める者。文化的規準としては、東方教会を信仰する、ギリシア語を話す文化的な生活を営む者) というアイデンティティを共有していた。彼らの世界観によれば、「ロメイ」以外は、「バルバロイ」と見なされた。したがって、ビザンツ帝国内にも、文化的規準からは「ロメイ」とは見なされない「バルバロイ」が存在した。西方の者たちは、かつてのローマ帝国領に暮らしており、理論上は、ビザンツ帝国の支配下にあると考えられた。そのため、彼らが「バルバロイ」のヒエラルキーの中で最下位に位置づけられることは決してなかった。Gill Page, *Being Byzantine: Greek Identity before the Ottomans* (New York: Cambridge University Press, 2008), 43-45. 806 年にはじまったビザンツ軍とフランク軍の戦闘は、812 年のアーヘンでの和約締結により終結した。このとき、ビザンツ皇

- 帝は、カールを「フランク人の皇帝」と呼んだ。佐藤彰一『カール大帝 ヨーロッパの父』〔世界史リブレット「人」029〕(山川出版社, 2013年) 088-089頁。
- (12) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 51.
- (13) Heikki Mikkeli, *Europe as an Idea and an Identity* (London: Macmillan, 1998), 19.
- (14) フランク王国の分裂(843年, 870年)後, ローマ教会圏としてのヨーロッパは, ノルマン人のヴァイキングとしての到来, またマジャール人(ハンガリー人)の襲撃に晒された。その結果, ヨーロッパ概念に新たな側面(ヨーロッパ=キリスト教=文明)が付加されたと Leyser は主張する。なお, 彼によると, ローマ教会への帰依にともない, ボヘミア, ポーランド, ハンガリーは, 11世紀初頭にはヨーロッパの一部と見なされたとする。Leyser, "Concepts of Europe," 41-42, 46.
- (15) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 52.
- (16) Hay, "'Europe' and 'Christendom,'" 45. この語の登場と意味の流動性については, 以下を参照。Tomaz Mastnak, *Crusading Peace: Christendom, the Muslim World, and Western Political Order* (Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press, 2002), 91-92.
- (17) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 59-60.
- (18) Hay, "'Europe' and 'Christendom,'" 46-49.
- (19) 1274年のリヨンの公会議で東西教会の合同が決議されるが, 1281年に解消された。以下を参照。George Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, trans. Joan Hussey (1956; rev. ed., New Brunswick, N. J.: Rutgers University Press, 1969), 460-465. [ゲオルグ・オストロゴルスキー(和田廣訳)『ビザンツ帝国史』(恒文社, 2001年) 595-601頁].
- (20) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 66.
- (21) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 71-82. コンスタンツの公会議における, 民族の対立については以下も参照。Louis R. Loomis, "Nationality at the Council of Constance: An Anglo-French Dispute," *The American Historical Review* 44-3 (1939): 508-527.
- (22) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 71.
- (23) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 95.
- (24) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 91-92.
- (25) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 109-110.
- (26) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 116.
- (27) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 118.
- (28) ペトラルカの業績と経歴については以下を参照。"PETRARCH, FRANCESCO," in *New Catholic Encyclopedia*, 2nd ed. vol. 11, Berard L. Marthaler, Gregory F. Lanave et al. (Detroit & New York: Gale, 2003), 212-217.
- (29) Nancy Bisaha, "Petraarch's Vision of the Muslim and Byzantine East," *Speculum* 76-2 (2001): 309. 分離派 schism と異端 heresy は微妙に異なる。前者が愛 charitas に対する罪(ひるがえって教会に対する謀反)を意味するのに

- 対し、後者は教義を曲解した信仰に対する罪であると伝統的には理解される。Andrea Moudarres, "Crusade and Conversion: Islam as Schism in Pius II and Nicholas of Cusa," *MLN* 128-1 (2013) (Italian Issue): 42.
- (30) Francesco Petrararch, "Fam. XIV, 5. To the Doge and Council of Genoa, An Appeal for Peace with the Venetians and for Civil Harmony" in Francesco Petrararch, *Letters on Familiar Matters*, vol. 2, *Books IX-XVI*, trans. Aldo S. Bernard (New York: Ithaca Press, 2005), 239.
- (31) Francesco Petrararch, "Sen. VII, 1. To Urban V, How the Return of the Church to Its Own See, Too Long Delayed, Must be Delayed No Longer," in Francesco Petrararch, *Letters of Old Age*, vol. 1, *BOOK I-IX*, trans. Aldo S. Bernardo, Saul Levin & Reta A. Bernard (New York: Ithaca Press, 2005), 262 の日付によると、June 29 [1366-1368] とある。ただし、Bisaha, "Petrarch's Vision," 309 は 1366 年と記している。
- (32) Bisaha, "Petrarch's Vision," 310.
- (33) Bisaha, "Petrarch's Vision," 309.
- (34) Petrararch, "Sen. VII, 1. To Urban V," 257.
- (35) ピッコローミニ (ピウス 2 世) の業績と経歴については、以下を参照。"PIUS II," in *The Oxford Encyclopædia Or Dictionary of Arts, Sciences, and General Literature*, vol. 5, W. Harris, J. A. Stewart. C. Butler, J. H. Hinton et al. (1833; repr., Bristol: Thoemmes Press, 2003), 489-490; "PIUS II," in *The Papacy: An Encyclopedia*, vol. 2, ed. Philippe Levillain (New York & London: Routledge, 2002), 1171-1173; "PIUS II, POPE," in *New Catholic Encyclopedia*, 368-370. 「ピウス 2 世」学校法人上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』第 4 巻 (研究社, 2009 年) 151 頁。
- (36) Terence Spencer, *Fair Greece Sad Relic: Literary Philhellenism from Shakespeare to Byron* (London: Weidenfeld & Nicolson 1954), 7-8.
- (37) Aeneas Silvius Piccolomini, *Epistola Ad Mahomatem II (Epistle to Mohammed II)*, ed. and trans. Albert R. Baca (New York, Bern, Frankfurt am Main & Paris: Peter Lang, 1990), 12 [ラテン語 116]; Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 83-84. これら 2 つの英訳のテキストをもとに訳出。
- (38) フィレンツェの公会議では、ローマ教会と東方教会が合同することが同意されたが、最終的に東方教会が実行に移すことを拒否したことで、合同は頓挫した。この一連の出来事については、以下を参照。Deno John Geanakoplos, "The Council of Florence (1438-39) and the Problem of Union between the Byzantine and Latin Churches," in Deno John Geanakoplos, *Constantinople and the West: Essays on the Late Byzantine (Paleologan) and Italian Renaissances and the Byzantine and Roman Churches* (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1989), 224-254; K. E. Fleming, "The Question of Church Union and the Fall of Constantinople," *Modern Greek Studies Yearbook* 12/13 (1996/97): 35-47.
- (39) Piccolomini, *Epistola Ad Mahomatem II*, 17. [ラテン語 121]; Hay, *Europe:*

The Emergence of an Idea, 84. これら2つの英訳のテキストをもとに訳出。

- (40) Piccolomini, *Epistola Ad Mahomatem II*, 17-18. (ラテン語 121-122)
- (41) Spencer, *Fair Greece Sad Relic*, 6; Piccolomini, *Epistola Ad Mahomatem II*, 1.
- (42) Aeneas Silvius Piccolomini, *Epist. cxxxi in Opera quae extant omnia* (Basel, 1551), 681. [Spencer, *Fair Greece Sad Relic*, 6 から再引用]
- (43) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 48. 中世初期のフランク人のアイデンティティをめぐっては以下を参照。Helmut reimitz, "Omnes Franci: Identifications and Identities of the Early Medieval Franks," in Ildar H. Garipzanov, Patrick J. Geary, and Przemysław Urbańczyk eds., *Franks, Northmen, and Slavs: Identities and State Formation in Early Medieval Europe* (Turnhout, Belgium: Brepols, 2008), 51-70.
- (44) George Huppert, "The Trojan Franks and Their Critics," *Studies in the Renaissance* 12 (1965): 227.
- (45) Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 48-49.
- (46) Gerard Delanty, *Inventing Europe: Idea, Identity, Reality* (London: Macmillan, 1995), 21.
- (47) Spencer, *Fair Greece Sad Relic*, 9; Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 50; Michael J. Heath, "Renaissance Scholars and the Origins of the Turks," *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 41-3 (1979): 453-471.
- (48) キリスト教の絶対的な敵としてイスラーム教が認識されるようになるのは、十字軍の時代に入ってからのものである。それ以前の時代、キリスト教徒は、イスラーム教勢力を、それ以外にも存在していた異教徒集団のひとつと見なしていたにすぎない。キリスト教徒は、イスラーム教徒に対して積極的に好意を示すことはなかったが、十字軍以降の時代と比較すると、非常に穏健な姿勢で接していた。キリスト教徒の有力者のなかには、イスラーム勢力と連合して、カロリング朝に対峙する者もあった。また、当時のキリスト教徒は、イスラーム教徒(ムスリム)を, *Agarini* あるいは *Saracini* といった民族集団を表す名称で書き記している。イスラーム教徒がキリスト教徒にとって妥協を許さぬ敵として位置づけられるにあたっては、ローマ教会の果たした役割が大きいことが指摘されている。ローマ教会は、管轄地域のキリスト教徒を統制し、まとめあげるために、キリスト教徒の敵を必要としたのである。Mastnak, *Crusading Peace*, 96-117.
- (49) Spencer, *Fair Greece Sad Relic*, 9.
- (50) Spencer, *Fair Greece Sad Relic*, 10.
- (51) 本稿第一節で論じた大陸を基準とした世界地理の把握は普遍的なものではない。イスラーム世界では、7つの気候帯(イクリーム)に分類する方法で世界の地理を認識していた。19世紀になるまで、イスラーム世界ではヨーロッパの人々が各大陸につけた名称は一般に知られていなかった。Bernard Lewis, *The Muslim Discovery of Europe* (New York & London: W. W. Norton & Company, 1982), 59 [バーナード・ルイス(尾高晋己訳)『ムスリムのヨーロッパ発見』(上)(春風社, 2000年)59-60頁, 72頁訳注(3)]. イラン系イスラーム教徒の地理学者

- イブン・フルダズバイブン・ハルドゥーン (?-912年頃) は自著でギリシア人による三大陸概念について言及したが、イスラーム世界でこの概念が一般的になることはなかった。M. E. Yapp "Europe in the Turkish Mirror," *Past & Present*, 137 (1992): 139.
- (52) Yapp "Europe in the Turkish Mirror," 139.
- (53) Spencer, *Fair Greece Sad Relic*, 10-12; Hay, *Europe: The Emergence of an Idea*, 109.
- (54) William St. Clair, *That Greece Still Be Free: The Philhellenes in the War of Independence* (Cambridge: Open Book, 2008) [first edition published in 1972 by Oxford University Press].
- (55) "No. II. Manifesto Addressed to Europe by Petros Mavromikhalis, Commander-in-Chief of the Spartan Troops, and the Messenian Senate, Sitting at Calamata," in Thomas Gordon, *History of the Greek Revolution*, vol. 1 (Edinburgh: W. Blackwood, 1832), 183.
- (56) ギリシア独立戦争の概要については以下を参照。Douglas Dakin, *The Greek Struggle for Independence 1821-1833* (London: B. T. Batsford, 1973). なお、ギリシア同様にロシアも、地理的ヨーロッパと概念としてのヨーロッパのずれを考察する意味で重要な事例を提供している。ロシアのヨーロッパ性をめぐる研究は多数存在する。例えば、以下を参照。Iver B. Neumann, *Russia and the Idea of Europe* (London & New York: Routledge, 1996).
- (57) 「東方問題」については、以下を参照。A. L. Macfie, *The Eastern Question 1774-1923, Revised Edition* (London & New York: Longman, 1996).
- (58) 帝国主義時代の「文明」の概念については、以下を参照。"Concept of Civilization," in John Merriman & Jay Winted eds., *Europe 1789-1914: Encyclopedia of the Age of Industry and Empire*, vol. 1 (Detroit: Charles Scribner's Sons, 2006), 461-464.
- (59) Mikkeli, *Europe as an Idea*, 86.
- (60) 歴史家とヨーロッパ概念、およびヨーロッパ史の記述をめぐる問題については、以下の論文が簡潔にまとめてある。Stuart Woolf, "Europe and Its Historians," *Contemporary European History* 12-3 (2003): 323-337.

(近現代ギリシア史／市ヶ谷リベラルアーツセンター兼任講師)